教育相談場面で語られる「ふつう」の意味

生井裕子[1]・佐野予理子[2]・黒石憲洋[3]
([1]桐朋学園女子部門・[2]清泉女学院大学・[3]日本教育大学院大学)

問題と目的　日本人は常に周囲の他者との調和の維持に配慮するため、他者との関係性が精神的健康にもたらす影響が大きい（遠藤、1995)。「ふつう」は、他者との関係性構築において望ましい特性であると認知されており（大橋、山口 2005)、近年では「ふつう」であることのポジティブさに焦点を当てた実証研究が積み重ねられている（佐野・黒石 2009、黒石・佐野 2009 他)。一方で、「ふつう」であることと「個性的」であることの間には葛藤が生じやすく（岡田、2007)、「ふつう」と「個性的」を両立出来なくなった時、突然の問題行動に至る状況も指摘されている（岩宮、2006)。実際、第一筆者の勤務する公立の教育相談所では、「ふつう」という言葉は保護者の葛藤や悩み、傷つきといったネガティブな感情と共に語られることが多い。このように、「ふつう」という言葉は用いられる文脈によって意味合いが異なるため、「ふつう」の用いられる様々な文脈を検討する必要がある。そこで、本研究では教育相談の場面を取り上げ、「ふつう」という言葉が持つ意味を描き出すための調査を行った。

方法　教育相談所で継続面接を行ったクライエントのうち、「ふつう」について言及した保護者 9 名を調査の対象とし、口頭で研究協力への依頼を行い、了承を得た。面接期間は 4 ヶ月～2 年半、平均期間は 14.4 ヶ月である。筆者が面接中・面接後に作成した記録から、クライエントが「ふつう」という言葉及び類義語を用いて語った発話を抽出した。発話は全部で 38 個抽出された。

結果と考察　「ふつう」の語られた文脈に基づいて、「ふつう」という言葉が持つ意味を以下の 4 つのカテゴリーに分類することができた（表 1)。カテゴリー①では、保護者は自分の子供が「ふつうじゃない」と認識しているため、子供がまわりと比べて「ふつう」かどうか、将来いじめられないか、といった不安が見られた。カテゴリー②では、保護者自身は自分の子供を「ふつう」と捉えていたが、周囲の他者から「ふつうじゃない」と指摘され、ショックを受けるなど、他者の見方に囚われる様子が見られた。カテゴリー③では、保護者は自分や子供が「ふつう」であるかどうかにこだわらず、自らの考えを重視しているが、子供は必ずしもその考えを共有しておらず、子供自身の感覚が置き去りになっていた。カテゴリー④では、保護者は「ふつう」であることに価値を置きつつ、子供の感覚も尊重し、コミュニケーションを模索する姿勢が見られた。以上より、保護者自身の「ふつう」や、他者の「ふつう」に囚われることが「ふつう」に対するネガティブな捉え方につながっており、「ふつう」を軽視することは子供への否定的対応につながっている一方で、「ふつう」に価値を置き、子供を尊重して関わっている場合は、「ふつう」を適応的に捉えていることが示された。

なお、本研究では発話の分析にとどまり、個人の内的状況までは扱っていないため、今後は事例研究などを通じた質的検討を重ね、クライエントにとっての「ふつう」という言葉の持つ意味の変化を明らかにしていきたい。

表１．　「ふつう」の捉え方による分類カテゴリー

カテゴリー	発話例	発話数	人数
①保護者自身の「ふつう」にこだわる	・人並みに出来るよう、家で苦手なことをやらせている ・まわりの子より出来ていないと不安。将来いじめられるかも ・ふつうだったら当たり前に出来ることが、言わないとできない	16	6
②他者から見た「ふつう」に囚われる	・医者からこの子は「ふつう」になりませんと言われてショック ・担任から「お子さんは普通じゃないかもしれない」と言われた ・母から「あなたは子供を怒らない、おかしい」と言われた	7	5
③「ふつう」を軽視し、保護者の価値観を重視	・父親は、世の中の一般的な人を軽蔑しているのかもしれない ・人にどう思われるかというのを気にしなくてもいい ・自分の子だから出来て当然という思いがある	9	3
④「ふつう」を適応的に捉える	・子供らしく、ふつうになった ・世間に身を置けるようになった	6	3